

you

今回は人称代名詞の you を取り上げる。実は、you に関しては、拙著『単語の文化的意味 — friend は〈友だち〉か』(三省堂, 2004)の‘I / you’の項目で多少取り上げた。しかし、このときは発話や文における人称代名詞の省略についての日英比較が不十分であった。さらに、you についてはその後新しい話題も出てきた。たとえば、政党の「みんなの党」の英語名は Your Party であるが、なぜ「みんな」が you になるのか、さらには、「あなた様」「おまえさん」のようになぜ日本語の第二人称に「様」や「さん」がつくのかなどである。今回は、これらについて文化的意味の観点から考えてみたい。

まず、日英の人称代名詞の省略の比較だが、周知のように、英語の場合はほぼ省略されないのに対して、日本語はしばしば省略される。たとえば、相手に対して相手がどこに住んでいるかを聞く場合は、英語では Where do you live? となる。しかし、日本語では「どこに住んでいるのですか」となり、you にあたる部分を省略する。英語の you がよほどの例外でない限り省略されないのは、発話や文の主体や客体をはっきりさせる傾向があるからである。なぜ発話の主体や客体をはっきりさせるのか。ヨーロッパ大陸で互いに隣接して存在していた民族は「対立」が基本概念にあり、言語も主体や客体をできるだけ明確にする必要があったからである。これは英語だけでなくゲルマン系やラテン系の言語など、ヨーロッパ大陸の印欧語族のほとんどの言語に当てはまる。一方、日本語では省略される理由としてしばしば引き合いに出されるのが、high context culture と low context culture の違いである。日本語は前者で context (その場の状況) に依存する言語、あるいはこれを利用する言語なので、目の前にいる相手にその相手について聞く場合は「あなた」を省略するのである。これは言語の経済性とも言える。言わなくてもわかるのなら省略する方がよいということである。

次に、なぜ〈you = みんな〉になるのかである。

結論から言うと、英語の you は単数にも複数にも使えるから、そして、you の日本語訳が「みなさん」や「みんな」という日本語になるからである。英語の you が単複両用であることは、すでに『単語の文化的意味』でも触れている。英語の第二人称は、かつては単数は thou, thy, thee で、複数では ye, your, you であった。これが、(なぜだか不明だが) 17 世紀あたりを境目に単数も複数も you, your, you に移行し、現在に至っている。この複数の you の「あなたたち」が「みんな」になるのである。

この「みんな」については、多少の補足が必要であろう。you が複数の場合はその意味する対象は 2 つに分かれるからである。1 つは、複数を相手にする場合である。教師が教室で生徒に Good morning. How are you today? と言うときである。あるいは、催し物などで Thank you very much for joining us. などと言うときである。この場合は〈you = 「(自分 [たち] を除いた) みんな」〉である。日本語では「みなさん」とか「皆様」と表すこともある。もう 1 つは、自分と相手の両方を含む場合である。You can't be happy if you are negative. や You never know what will happen in life. など、いわゆる一般総称の you である。この場合は〈you = 人々〉である。

さて、このように you は「(自分 [たち] を除いた) みんな」と「自分 [たち] も含めたみんな」の 2 つがあるのだが、Your Party の your はどちらだろうか。私は、表面上では、後者(自分 [たち] も含めたみんな)であるが、意識下には、前者の「(自分 [たち] を除いた) みんな」であると推測している。すなわち、この“Your”には、「あなたたちみなさんのために尽くす党ですよ」というメッセージが込められているのではないだろうか。また、「あなた様」のように第二人称に「様」や「さん」と付けるのも相手への敬意である。この心情は、欧米にみられる〈自分 [たち] を押し出す文化〉ではなく、日本の〈相手を先に立てる文化〉の具現の例かもしれない。